OEDの発音表記について
——OED 1 とOED 2 の比較、分析——

北山　長貴

1　NEDからOEDへ

NEDとは*The New English Dictionary on Historical Principles*（史的原理による新英語辞典）という表題をもつ10冊からなる辞典であり、1884年から1928年にかけて出版されている。これは英国フィロロジー学会（The Philological Society of Great Britain）の企画で、1857年にその編纂が決定されたものである[1]。そしてその監修者がスコットランド出身の言語学者、Sir.James Augustus Henry Murray（1837-1915）であった。しかしMurrayはこの辞書の完成を見ずに死去している。

この10冊からなるNEDのreprintとして12巻からなる新たな辞書が1933年に発行された。これが*The Oxford English Dictionary*、通称OED第１版（OED１）である。その後1972年から86年の間に４冊からなるSupplement（新補遺）が出版されている。そして1989年には改訂版である第２版（OED２）が出版されるに至った。この改訂によりOED１のSupplementの語彙が本体に組み込まれたのはもちろんのこと、さまざまな「改良」が試みられている。本稿では特にOED２における音声表記について、その記述体系をOED１のそれと比較、分析し、考察を加えてみることにする。

2　OED 2 について

OED２の Preface（まえがき）において、オックスフォード英語辞典の意図がまず述べられている。

The aim of this Dictionary is to present in alphabetical series the words that have formed the English vocabulary from the time of the earliest records down to the present day, with all the relevant facts concerning their form, sense-history, pronunciation, and etymology. It embraces not only the standard language of literature and conversation, whether current at the moment, or obsolete, or archaic, but also the main technical vocabulary, and a large measure of dialectal usage and slang[2].

この辞書の目的は初期の時代の記録から現代に至までの英語の語彙をアルファベット順に提示し、語彙の形式、意味の歴史的変遷、発音、語源といった重要な事項を載せることである。また、現在使用されているとか廃語・古語などにとらわれず広く文献・会話からその語彙を収集した。そして標準的な言語のみでなく、主要な専門用語、また多くの方言的用法と考えられるもの、俗語をも取り入れている。

Prefaceに続くIntroduction（序論）ではこの第２版の目的が述べられている。

The main purpose of this second edition is to present a version of the Dictionary in which these two parts, the twelve volumes and the four volumes, are amalgamated into a continuous, seamless text. Accordingly, every article from the Supplement

has been either added in its proper alphabetical position (if a wholly new entry) or merged with its corresponding OED entry.... Instead of the sixteen volumes of large but unequal size volumes, which it is hoped will prove more convenient to use[3].

第2版の第一の目的は12冊からなる第1版の本体と4冊の新補遺版を一つの継目のないものとすることである。そのために新補遺版の語彙項目は新しくOED本体の見出し語とするか、あるいは既にある項目と合併させている。さらに、それぞれ厚さが違っていた本体と新補遺版の合計16冊本は新たに厚さの整った20冊本となり、合計290,500の見出し語を持つ辞書となった。

このように改訂されたOEDであるが、第2版の特徴については"Special features of the second edition"という項目で詳しく述べている。ここには Supplementary text, General revisions, Local corrections, Typographical changesの4項目があり、その中で特に注目したいのは、General revisionsである。というのも、この項目の第一番目に IPA and stress-marked headwordsという見出しで音声表記について以下の様に述べられているからである。

The system devised by Sir James Murray for representing pronunciation, used in both the first edition of the OED and the Supplement, has now been replaced throughout the text by the International Phonetic Alphabet. Many headwords and lexical items in the two parent works, had their stress－ pattern marked by symbols placed within them, instead of being followed by a phonetic transcription; these marks, which are placed after the stressed vowel, have been replaced by IPA stress-marks, which are placed before the stressed syllable[4].

この第2版においては、Murrayによって考案された音声表記法が－これはOED 1、そして新補遺版でも使用されていたが－IPA方式に全面的に変更されたことを述べている。さらにアクセントに関しても、その表記法が変更されたと付け加えている。そして、そのあとの"The translation of the phonetic system"という項目では4ページにわたり今回の改訂について詳しい説明を行なっている。

3 The translation of the phonetic system

OED 2における音声表記の変更について、"The translation of the phonetic system"の項目ではまず次のように述べている。

The system of phonetic transcription devised by Sir James Murray for use in the first edition and followed, for the sake of consistency, in the Supplement is asubtle and flexible means of recording English pronunciation. But many of the effects for which Murray strove in the design of his system were realized, not long afterwards, in the International Phonetic Alphabet (IPA). It seems very possible that, if the IPA had already achieved full development and widespread acceptance at the time that Murray was beginning work on the Dictionary, he would have adopted it instead of a system of his own. It was therefore logical to consider replacing Murray's system with IPA throughout the Dictionary. IPA has the advantage that it is very widely accepted and understood, and can be used to represent the sounds as well of regional and dialect English and foreign languages as of standard Englsih[5].

OED 1そしてSupplementに使用されている発音記号の体系はSir James Murray考案によるものであるが、この体系は英語の発音を記録するのには適し、また詳細であるとしている。また彼が考案した体系はIPAの体系成立に貢献をしたとも述べている。そして、もしMurrayがOEDの編集に取りかかっていた時、IPAの体系

がすでに確立され、受け入れられていれば、Murray自身で体系を作らず、IPAを使用していたという可能性があるとしている。

このような説明によりMurrayの体系を評価しつつも、IPAに変更することはある意味で当然のこととしている。事実、現在IPAは発音の表記法として広く受け入れられている。また標準英語だけでなく、英語の地域的な変化、方言等、さらに外国語の発音を記述するのに適しているものとなっている。

以上の様に、普及度、そして英語だけでなく他の外国語の音韻表記を一つの体系で記述するのに適している優位性を考えると、Murrayの考案した発音表記の体系をIPAに変更せざるを得ないと結論ずけている。次にそれぞれ、強勢、子音、母音についてOED 1とOED 2の表記体系を比較、分析しつつ考察を加えてみたい。

4 Strss

強勢について第2版の "The translation of the phonetic system"の項目では、次のように述べている。

> A notable feature of the Dictionary is that obsolete main words, derivatives, and certain variant forms and combinations are not given phonetic transcriptions but have their stress-pattern indicated: the stress-dots are printed within the body of the word or form. Naturally consistency required that the stress-dots within these forms should also be altered to IPA stress-marks[6].

つまりOED 1の発音記号は廃語となった主要見出し語、派生語、異形、合成語には記述されなっかたが、その場合でも強勢記号は見出し語に付与されていた。強勢記号に関しては、従来OED 1ではstress-dots; (·) が強勢のおかれた母音の後に付与されていた。OED 2ではこのstress-dotsもIPA方式に従い stress-marks; (ˈ) として強勢のおかれる音節の前に付与されるようになった。つまり発音記号がある見出し語はその中にストレス記号を付け、発音記号が省略されているものは、見出し語にストレス記号を付与している。さらに第二強勢は (ˌ) を使って表示している。

次に、OED 1とOED 2の基本的な強勢記号の付与の仕方の違いをまとめると、以下のようになる。

OED 1、OED 2の強勢記号付与の比較

	OED1	OED2
Primary	adjoint (æ·dʒoint)	adjoint (ædʒɔˈint)
Secondary	a:eronau·tical	aero ˈnautical
Compound	air-condi:tioning	ˈair-con ditionaing

このように、基本的には記号とその付与の位置が変更されたわけであるが、その他にもいくつかの点で変更がみられる。

まず、OED 1の表記における特徴を2点述べておきたい。"telescopic,antecendent"のような語においては－この場合第一音節に第二アクセントがあるが－母音表記から必然的に第二強勢が解かるしくみになっている。つまりOED 1の表記においては強勢を持たない母音は全て補助記号 (˘) の使用によって表記されている。これにより補助記号がついていない母音が強勢記号の付いた母音の次に強く発音されるこになる。次に、複合語で互いの結合が弱い場合、ともに強勢をもつことがある。たとえば、"aftercounsel"のような語では最初の音節がより強く発音され (··) で表記される。OED 2ではその改訂により以上のような表記はできなくなった。

次にOED 2の表記であるが、強勢記号を強勢のある音節の前に示すことにより、分節をも同時に表示することができようになった。これは、stress-markがあれば2音節以上の単語であり、なければ1音節ということである。たとえば、higher (ˈharər) は2音節、hire (harər) は1音節と区別ができる。OED 1では強勢記号と分節記号を分けて使用していたため、このような表記は不可能であった。

次に、音節の扱いかたについて少しふれておきたい。OED 1において音節は基本的には分節されて表記されていない。しかし以下の場合において補助記号を用いて分節される。つまり二重母音を形成しない母音が2つ並んだ時、また

子音の場合も同様に、2つの子音がconsonantal diphthongを形成しない時、(–) で2音節であることを示す。そして、形態素を明示したり長い単語においてaccentual groupに分けるためにも使用された。これに対しOED 2では先に述べたように強勢記号で分節が示される。ただし、double consonaltの時のみハイフォンによって分節される。

5 Consonants

子音に関して引き続き、Introductionで以下のように述べている。

> With regard to the consonants, there are few drawbacks to Murray's system, apart from the dearth of symbols for foreign sounds. Indeed, all but one of the primary consonant symbols correspond exactly to the set employed for English in the IPS[7].

Murrayの体系からIPAに変更する事に特に問題はなかったとしている。OED 1とOED 2の子音の表記体系を比較すると次のようになる。

OED 1、OED 2の子音表記

	OED1	OED2
go	g	g
ho	h	h
run	r	r
her	ɹ	(r)
see	s	s
wear	w	w
when	hw	hw
yes	y	j
thin	þ	θ
then	ð	ð
dish	ʃ	ʃ
ditch	tʃ	tʃ
vision	ʒ	ʒ
judge	dʒ	dʒ
singing	ŋ	ŋ
finger	ŋg	ŋg

この表から解るように、表記記号は変更されているものがいくつかある。しかし、その音韻体系の変化を示すようなものは子音に関してOED 1からOED 2の改訂においては認められない。

最後にOED 2への改訂に伴い、子音についての注意すべき点をまとめると以下のようになる[8]。

1) (hw)："wh"の綴りに対する発音記号
2) linking r：語尾のrで次に母音が来た場合linking rとして　発音されることが予測される語については、(　)の中にrを入れた形（r）で表記する。
3) 文脈によって発音される可能性がある音は（　）の中に入れて表記する。例えば、"suit"の(j)、"impromtu"の(p)、"bench"の（t）などである。
4) OED 2では音節を区切るためにハイフォンを使用する。(t)と(ʃ)がとなりどうしで違う音節に属している場合などはこの間にハイフォンをいれる。

6 Vowels

子音に関してOED 1からOED 2への変換にはとくに問題はなかったようである。これはMurrayの考える英語の子音体系とIPAのそれと音韻的違いがないことを意味している。しかし母音に関しては違いが多くみられる。

母音の表記のOED 1からOED 2への変換に関してはOED 2のIntroductionで以下の様に述べている。

> A fundamental feature of the vowel system does not translate easily into IPA is its analysis into 'ordinary','long', and 'obscure' vowels[9].

OED 1における母音の表記の特異性というものがIPA方式への変換を容易にさせない原因を作っている様である。まず、OED 1の母音の表記がどのようなものであるがふれておきたい。

OED 1では母音を下に示すように3種類に分けている。

OED 1における母音の表記

Ordinary vowel——unmarked
Long vowel——marked with macron(long mark)
Obscure vowel——marked with breve(short mark)

これは基本的には同じ発音記号に補助記号を付け違った「質」の母音を表記をするものであった。同一の記号を使用し補助記号でその質の

違いを表示することは、その基底にある母音の音価は同じであることを示している。たとえば、IPA方式では強勢のない母音、特に強勢がおかれた次の母音はmid-mixedの（ə）になる。しかし、OED 1ではこれを（ə）と表記せず、もとの音価に（˘）を付けて表記する。これにより"theoretical,actual pronunciation"が表記できるとしている。

このような母音体系のためIPA方式への変換においてさまざまな問題点が生じている。以下、あいまい母音、二重母音、長さ、"short e"について順にOED 1における表記体系とOED 2への変換後の表記体系に関して比較、考察を行なってみる。

まずobscure vowelsであるが、OED 2のintroductionにおいては以下のようにその特性を述べている。

> If, as has here been done, it is set aside, then most of the obscure vowels are equivalent to the IPA ə ... ; while a few are translated into ɪ ...[10].

これはobscure vowelをしめす"breve"（short mark）のついた母音はĭを除きすべてĭとしている。具体的なOED 1とOED 2におけるobscure vowelの表記の変化は以下のようになる。

OED 1、OED 2の Obscure vowelの表記

OED 1		OED 2
ăe	———	æ
ĭ、ĭ	———	ɪ
ǫ̆	———	ɔ:
ŭ、ă、ŭ		
ĕ、ŏ、ǫ̆	———	ə
ĕ、ŏ、ə		

OED 2においてはobscure vowelを補助記号によって表記することをやめたのでæ、ĭ、ĭ、ǫ̆以外の音はすべて（ə）と表記されている。しかしこのobscure vowelが何かの理由ー歌などでーアクセントをおいて発音されると、OED 2の表記では元の音価が再現できなくなる。

次に、二重母音の扱いであるが、OED 1ではdiphthongはlong vowelとして扱われている。これは現在の音声理論とは異なるが、Murrayはdiphthongを"long vowels followed by glides"という考えにもとづいている。

そして長さ（length）についてであるが、現在の一般的な表記法においてshort vowelまたはlong vowelと考えられている母音をOED 1では共にordinary vowelと考えている。しかし、このlong vowelはアクセントとの関係においてさらに下位区分されている。例えば、"Matthew"の第二音節の母音はアクセントがないことからordinary vowelであり、一方"few"の母音はアクセントがあることからlong vowelと分類されるのである。つまり、アクセントのない長母音だけがordinary vowelであり、アクセントのある長母音がlong vowelと分類されている。

長母音、短母音の分類

	OED1		OED2
"Matthew"	ordinary	———	long
"few"	long	———	long

OED 1ではアクセントの違いによりlong, ordinaryと分類された母音が、OED 2では共に長母音として表記されている。つまりOED 1で二つの違った質を表記していた記号がOED 2ではその差異を表記できず、同一表記となっている。

最後に"Short e"についてであるが、例えば"bed"の母音はIPA方式では（ə）で表記されるが、OED 2では（ə）よりopenである（ε）を使用している。この音は音声的にcardinal vowelのNo. 3（ε）に近いためである。

以上のようにOED 1における何種類かの母音を中心にそれぞれがIPA方式に従った音韻体系のOED 2ではどのように変換されたかを概観してきた。Murrayの音声表記体系を崩さずに変換しているとはいえ、母音に関して言えばその比較からいくつかの変化というものが明らかになった様である。以下にOED 1，OED 2の母音表記の比較をまとめてみる。

OED1	OED2
Obscure vowel	Short vowel
	Shwa (ə)
Long vowel	Long vowel (+accent)
	Diphthong
Ordinary vowel	Short vowel
	Long vowel (−accent)

7 The chief phonological features in the dictionary

OEDは今まで述べてきたように、独自の音韻体系を持っているためその記述体系が他の辞書と違う点がいくつか見られる。その違いについてOED 2では "The chief phonological features in the dictionary"という項目で7つ−本稿ではその内5つを扱う−の特徴をあげている。ここではOEDの表記法のその特異性については特に議論しない、しかし、これらの特異な音声表記がIPA方式を取り入れたことによりOED 1からOED 2でどのように変化したかについて比較、分析してみたい。

1）"idea,realize,museum,skua"等の語においては強勢のある狭母音：(i:,u:) で表記され、これらの語は"dear,rear,secure"などの語における二重母音：（ɪə、ʊə）と対立する[11]。この場合、OED 1ではそれぞれ（*i*）と（ïᵊ）という音声記号で表記していた。これらは共にlong vowelに分類されているものであり、その対立は「質」によるものである。しかしOED 2のIPA方式では(i:ə)、（ɪə）という音声記号で表記されその対立はもはや質ではなく、「長さ」によるものとなってしまっている。また（ü）、（üᵊ）の対立についても同様である。

2）狭母音を表す音声記号 (i:,u:) は強勢のおかれない音節、"delineate,creation,perpetual, graduate"等の語を表記するのに使用される。そしてその音は、"genius, demonic, circulate"等の語の、より開いた母音（ɪ）（ʊ）とそれぞれ対立する[12]。

OED 1における表記法では"delineate, perpetual"の母音を長母音ではなくordinary vowelとみなしていた。つまりMurrayの考案した体系においては、これらの母音は"genius,circulate"の母音とは長さで対立するものではなかった。事実、OED 1では前者は（*i*、*u*）であり、後者は（i又は*i*、*ŭ*）で表記されている。つまりMurrayはこれらの母音の音声的な違いはその質−ここでは特に「緊張」−という点で対立していると考えている。しかし、OED 2ではIPA方式を導入したためにここでもこれらの対立は質の対立ではなく、長さの対立：(i:とi,u:とu) となってしまっている。

3）"homographic, protocal" などの強勢のない音節を二重母音：（əʊ）で表記し、これは"homonym, melody"などの語のあいまい母音（Shwa）と対立する[13]。

ここではOED 1からOED 2への変換に関して特に問題はないようである。OED 1におけるordinary vowelの（*o*）は現在の"hero"の第二音節の音であるのでその質においてOED 2の（əʊ）と同じ音価を表記している。また（*ŏ*）もその質において（ə）を表記するのには問題ない。この場合において、OED 2における表記はMurrayの音韻体系を十分に表記しうるものとなっている。

4）成節子音と、あいまい母音＋子音の対立を認める；"principle"と"principal"は対立する[14]。

この対立をOED 2では"principle"を(-p(ə)l)、そして"principal"を(-pəl) と表記している。この点に関しては多くの発音辞典はその対立を認めていない[15]。そのために"principle"を括弧付きで表記し、この対立が不安定なものとして扱っている。

5）"glory, boarder, mourning"の二重母音(ɔə)と"saurian,border,morning"の長母音 (ɔ:) の対立をみとめる[16]。

OED 1ではそれぞれ（ōᵊ）、（ǭ、ǭ）と表記して2つの音を対立させている。ここで注意しなくてはいけないのは、この母音の対立は長さ−共にlong vowel−によるものではなく質によるものということである。しかし、OED 2，IPA方式に従った音韻表記になるとこれらの2つの音の対立は、二重母音の（ɔə）と長母音の（ɔ:）という対立になっている。

以上がMurrayの音韻体系を踏襲したとさ

れるOEDにおける音声表記の特徴となっているものである。しかしOED 1からOED 2への改訂においてこれらの特徴を受け継いできてはいるものの、IPAを採用したためにその表記体系自体にいくつかの変化が見られるようになった。IPA方式によってもMurrayの考案した音韻体系を忠実に表記できる場合（(əʊ) と（ə））の対立もあった。しかし大部分は、本来その音の質による対立を表記していたものがその量（長さ）による対立という形でしか表記できなくなってしまっている。以下にOED 1とOED 2のそれぞれの表記法に基づいたこれらの特徴を比較しまとめてみる。

The chief phonological features

		OED1		OED2	
1）	①	*i*	(long)	iːə	(long)
		īᵊ	(long)	ɪə	(diphthong)
	②	ū	(long)	uːə	(long)
		ūᵊ	(long)	ʊə	(diphthong)
2）	①	*i*	(ordinary)	iː	(long)
		ĭ、*ĭ*	(obscure)	ɪ	(short)
	②	i*u*	(ordinary)	uː	(long)
		u	(ordinary)	ʊ	(short)
3）		*o*	(ordinary)	əʊ	(diphthong)
		ŏ	(obscure)	ə	(short)
4）		"-p'l"	(syllabic)	"-p (ə) l"	
		"-pal"	(ə+C)	"-p (ə) l"	
5）		ōə	(long)	ɔə	(diphthnong)
		ǭ、ǭ	(long)	ɔː	(long)

8 General explanation

Introductionの後には、Gneral explanationという章が続く。そこではOEDの概念というようなものが項目別に9つ述べられている。その最後の項目であるPronunciationでは音声表記についての説明が付け加えられている。OED 2では音声表記に関して大きな改訂が行なわれたため、先に述べたように、Introduction等においてその殆どが説明されている。しかし、OED 1においてはその音声表記の説明はこのGeneral explanationの項目だけであった。第1版の方針を踏襲している第2版であるために、General explanationの発音の項目も第1版の内容を受け継ぎながら、改訂を行なっている。ここではまずOED 1、OED 2の General explanationの内容を比較し、そしてIntroductionでは扱われなっかた音声表記について考えてみたい。

まず、OED 1、OED 2に共通の音声表記にたいする方針、概念というものが述べられている。

The pronunciation is the actual living form or forms of a word, that is *the word itself*, of which the current spelling is only a symbolization - ...[17]. (Italics in original)

発音はことばの生きた姿、ことばそれ自体であり、綴り字によって示されるものは1つの現象にしかすぎないとしている。

それゆえ、綴り字以外に、その単語の生きた姿である発音を表記するために他の記号を使用す必要がある。ここに発音記号の必要性が存在するのである。そしてOED 1では以下の様に続けいる。

But the living word is *sound* cognizable by the ear, and must therefore be itself symbolized in order to reach the understanding through the eye. The most that can be done is to provide a careful and consistent means of representing it, in which the symbols should agree with the actual values of letters used either in the earlier or later stages of the language[18]. (Italics in original)

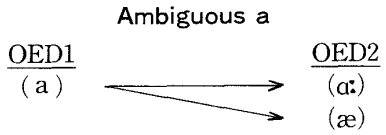
本来耳によって認識される生きたことばという「音」は目を通しても耳を通した時と同じ様に認識されるように表記されなくてはならない。さらに、その表記のためには細かな、一貫した表記法が必要だとしている。これは、音声表記というものは忠実に実際の音価を示されなくてはいけないとする、Murrayの音声表記に対する態度を明らかに示している。しかし、おもしろい事に、OED 2におけるGeneral explanationではこの部分の前で説明が終わっている。続いて、IPA方式を採用した事について述べている。

OED 2はこれまで述べてきたように音声記号による表記に関していくつかの変更はあったが、基本的にはMurrayのシステムつまりOED

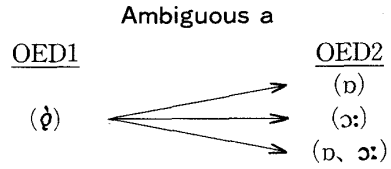
1の方針を受け継いでいることになっている。しかし、上記の様に「その音価を忠実に示す事が必要である」という部分が省略されていることは注目に値する。つまり新しい記号体系を使用したために、「記号が実際の音価と一致する」ことが難しくなってしまったと暗に示している様である。Murrayの音韻体系を一方で評価しながらその記号だけを変換したはずのOED 2ではあったが、結果はその表記体系自体に変化が出てきたことを示している。

つぎにIntroductionで扱われなかった表記について述べてみる[19]。

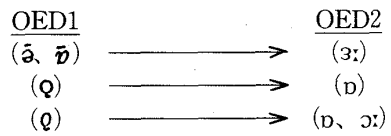
1）OED 1では"pass,comman"などを"man"のaまたは"father"のaのように二種類の発音が存在しこれをambiguous aと呼んでいる。しかしOED 2では（ɑː, æ）という二つの記号を使用することで、このambiguous aの発音をより忠実に表記することが出来るようになった。



2）"off, soft, lost"の母音をdoubtful lengthと呼ぶ、この母音は"got"の様にshortの場合と"Corfe"の様にlongの場合があり、それを（ɒ̀）で表記している。IPA方式に従うと、"got"は（ɒ）で、"Corfe"は（ɔː）で表記される。そしてdoubtful lengthの母音にはこの二種類の母音が並記されている。



3）"fir, fur"は音声学者には対立音であるが、英国南部では一般的に同一音として認識される。しかし、OED 1では理論に忠実なあまり（？）二種類の記号を使用して表記している。この点に関して、OED 2では同じ音(ɜː)として表記している。同様に、"watch, Scotch"の母音もOED 1では違う表記であるが、OED 2では同じ音（ɒ）で表記している。



たしかにこのような母音は一般的には対立しない。その意味で音韻的経済性という点では妥当であるかもしれない。しかし、音を忠実に再現するという点においてはIPAを使用したためにそのような細部まで表記しきれなくなっているとも考えられる。

4）lengthについてOED 2においても、「現在の一般的な慣習」として（：）で表記するとしている。しかしほとんどの長母音、短母音はその長さによる対立よりも、調音的な違いにより対立するものとしている[20]。その例として、close vowelsの(iː)、(uː)とopen vowelsの（ɪ）、（ʊ）の対立があるとしている。つまり母音を長さ（量）でなく質で区別しようとするOEDの方針を強調している。

以上の様に、OED 1ではその差異をうまく表記できなっかた記号もOED 2の体系においては、下位区分化することにより、詳しく表記できるようになった。しかしgeneral explanationsの母音の項目でOED 1からOED 2への変換に際して生じた問題などは、先の"the chief phonological features"で扱った問題点とその本質において同じものである。それは、さまざまな母音の対立がOED 1においてはその質によるものであったが、OED 2においてはその長さによるものとなってしまった点である。

9　OEDの音声表記体系

以上のように、OED 2における強勢、音節、子音、母音の音声表記をOED 1と比較し分析をしてきた。OED 2ではさまざまな点において改訂が行なわれたが、その表記に関する基本的な概念はOED 1と変化がないとしている。しかし、実際には音韻体系に関わる大きな変化が現われている。ここでもう一度、OED 2における音声表記体系に関する基本的な考えを確認しておきたい。

Murrayの考案した発音表記（アクセントの

付与も含む）からOED 2のIPA方式への変換にあったてはコンピューターを使用している[21]。これはあくまでも機械的に記号を書き換え、OEDの音韻体系は崩さないためである[22]。もちろんこの変換の過程においてはまざまの問題があったが[23]、とにかくMurrayの体系に手を加えず、そのままIPA方式に平行移動させようとしている。というのも、Murrayの発音表記自体に対しては以下のように考えているからである。

It is used indiscriminately both for phonetic and transcription: that is, it is a set of symbols employed to represent both the members of the particular set of sounds that constitute the phonology of English, and the much larger set of infinitesimally differing sounds from all other phonologies to which reference is made in the Dictionary. As a means of representing standard English pronunciation, Murray's system is sensitive and generally lucid[24].

Murrayの考案した表記体系は音声的表記と音素的表記の両方の要素があるとしながらも、彼の体系は明確であるとして、英語の発音を表記する手段として適切であることを認めている。もしMurrayの記号体系に関してその不便さとういものがあれば、それは方言、外国語の表記といった特殊なものだけである。これは Murrayが記号を考案した当時は記号の数が限られていたため、十分でないのは当然の事である。

10 まとめ

以上のようにOED 2における音声表記はOED 1の表記を機械的に変換したものであり、その音韻体系はMurrayのものをうけついでいることを強調している。しかし、"The chief phonological features", "General explanation"の各項目において述べられた新しい体系は必ずしもOED 1の体系を忠実に変換したものではなくなっている。もちろんOED 2の表記によって以前より明確化された点、"ambiguous a", "doubtful length"（əʊ）と（ə）の対立、アクセント記号による分節、などはある。しかし全体を概観していえることは、OED 1からOED 2への変換における質と量の関係である。Murrayの音韻体系は音価を忠実に再現できるものとして作られている。特に、obscure vowelの表記などは補助記号をうまく利用し、その音の質というものに細かな注意を払っている。しかしOED 2においてはIPAの体系を受け入れたために、今述べたobscure vowelの問題をはじめ多くの点において「音価の忠実な再現」ができなくなっている。特にそれは母音の長さ（length）に現われる様である。Murrayが母音をその質により対立させているものが、OED 2では長さの対立にすり変わっている。またOED 1では音の対立が表記できたものが、OED 2ではできなくなっているのがあるのも残念である。その背景には音声的表記を求めたOED 1と音素的表記になってしまったOED 2との違いが浮かび上がっている。

［註］

(1) Palmer ed., Selected Papers of J.R Firth 1952-59., (Kenkyusha,1975). pp. 71-72.
(2) The Oxford English Dictionary,-2nd ed.,(Oxford,1989), p. vii.
(3) Ibid., p.xi
(4) Ibid., pp. xii-xiii.
(5) Ibid.
(6) Ibid.
(7) Ibid., p. xix.
(8) Ibid., p. xxxiii.
(9) Ibid., pp. xix-xx.
(10) Ibid., p. xx.
(11) Ibid.
(12) Ibid., pp.xx-xxi.
(13) Ibid., p. xxi.
(14) Ibid.
(15) Ibid.
(16) Ibid., p. xxxi.
(17) Ibid., p. xxxiii.（同様の文が第1版にも見られる、p. xxxiv.）
(18) *The Oxford Engish Dictionary,* -1st ed.,（Oxford,）, p.xxxiv.
(19) Ibid.
(20) コンピューターにより137,152個の発音記号と

137,274個のアクセント記号が自動的に変換された。

(21) Essentially, a straightformed literal translation from the Murray system to IPA has been attempted accompanied by correction of the errors inevitably arising from process. (Op cit., p. xix.)

(22) Ibid., p. xix.

(23) Ibid.

References

The Oxford English Dictionary -1*st ed.,* Oxford University Press.

The Oxford English Dictionary -2*nd ed.,* 1989. Oxford University Press.

Palmer, F.R ed., *Selected Papers of J.R Firth* 1952-59., 1975. Kenkyusha.